

裏工作に使われた女性たちの真実は

中野 理恵

週刊誌のキャッチコピーのような題名だが、示唆に富むドキュメンタリー映画である。2017年2月13日、マレーシアのクアラルンプール国際空港のロビーで起きた金正男暗殺事件の真相と、犯人として逮捕された2人の20代の女性、インドネシア人のシティ・アイシャとベトナム人のドアン・ティ・フォンへの裁判の行方を追った内容である。事件についての緻密な取材に基づき、担当弁護士たちによる数多くの証言が示される。加えて、マレーシア人ジャーナリストのハディ・アズミと、ワシントン・ポスト紙北京支局長アンナ・ファイフィールドが、狂言回しのような立場で随所に登場し、深い闇に包まれたこの事件の背景を解き明かす。映画には、事件に関連した実際の映像がふんだんに引用されていて、実に興味深い。

金正男は北朝鮮の現在の最高指導者、金正恩の異母兄にあたる。彼の名前は、2001年、東京ディズニーランド行きを目的に、偽装パスポートで入国しようとして国外強制退去させられた事件で、日本でも知られている。その金正男が、空港で劇薬の神経剤 VX を顔になすりつけられたために、亡くなってしまった。だが、犯行の一部始終が空港の監視カメラに収められていたために、ほどなくして、シティとドアンが逮捕される。

貧しくて性風俗で働くようになったシティ。ドアンは大学で会計学を学んだが、思うような職に就けずバブの接客係になった。証言によると、驚くことに、日本のテレビ向けの〈イタズラ動画〉の撮影だと見知らぬ男たちに騙されて、それとは知らずに何日間にも及ぶ暗殺の訓練をさせられた上で、〈本番〉に臨んでいたのだった。事件の背後に北朝鮮の工作員と思われる8人の男性が浮かび上がってくるが、結果として、行方不明になったひ



©Backstory, LLC. All Rights Reserved.

とりを除き、全員が、事件後マレーシアを離れてしまう。背後に政治取引があった。

一方、拘留所で隣同士になったシティとドアンは、壁を隔てて親しくなる。いよいよ裁判が開始すると、何と、シティへの告訴が取り下げられるのではない。キツネにつままれたような展開だ。手錠を外され裁判所から出てくるシティ。ここでも、インドネシアと北朝鮮政府との間で政治取引があったのだ。ドアンも北朝鮮と友好関係にあるベトナム国籍であったため、日数はかかったが、結果として政治取引により減刑されることになる。

本作を見て強く抱いた感想が2点ある。まずは、私たちにプライバシーはもはや無くなってしまっている、という事実だ。監視カメラに囲まれて暮らしているという、背筋も凍るような現実がある。例えば、シティが金正男に VX をなすりつけると、すぐに現場を離れ、空港のターミナルから出てタクシーに乗り込むまでが画面に映されるのだ。あたかも再現ビデオを見ているようで、劇映画なのか、と思うほどだ。もう1点は、無垢の罪である。シティもドアンも年齢からは想像できないほど人を信じてしまっている。無垢の結果を2人はかみしめていることだろう。

《Cinema Information》

『わたしは金正男を殺してない』

アメリカ映画(104分)／監督：ライアン・ホワイト／10月10日(土)よりシアター・イメージフォーラムほか全国順次公開。

なかのりえ：映画プロデューサー、ディストリビューター。(株)パンドラ代表。『ハーヴェイ・ミルク』を第1回配給作品として、これまでに100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著書に『すきな映画を仕事にして』(現代書館, 2018)等。